

彼女の眼差し

## 彼女の眼差し

---

私が十歳の時。

「————ませすぎた眼付きをしていました。彼女は年中大人の世界のことを空想してばかりいましたので、自然顔付きもませてきたのでしょう」

この二行に私の人生は大きく左右されたと言っても過言ではないだろう。

このたった二行に、突き動かされた心が大きすぎ、その後の物語を読み進めることができない程であった。

事実、私はこうして今回このエッセイを書くにあたって、初めて先の数行の続きを読んだのである。

小公女セーラ。

図書館で何気なく手にとったその本を借りるかどうか迷い、出だしだけ読んでみようとページを開く。

たった1ページにも満たない数行で、私は完全な敗北感と、羨望に近い嫉妬、そしてセーラに挑む決意と共に本を閉じ棚へ戻した。

誰にでも自分は特別でありたいと願う気持ちが少なからずあるだろう。ただ私は人よりもそのような気持ちが強かったように思う、と同時に、少しは特別なのもかもしれないと自惚れていた節もある。そんな中、目の前に現れた本の中の少女は紛れも無く当時の私にとって特別な存在に映った。

当時、ませた眼付きをしている子供は私の周りには一人もおらず、私自身、空想こそして楽しんではいたが、ませた眼付きをしているなど一度たりとも言われたことがないではないか。

この時点でまだ私はセーラの性格がどのようなものなのか知らない。明るいのか暗いのか、優しいのか意地悪なのか。

ただ、私もセーラと同じ眼付きを手に入れたい。

その思いだけが強く心に根を張った。

内面が眼差しに出るということは分かっていたし演技なんてしたって特別になれないことは分かっていた。幼稚な頭で考えたことはひとつだ。

「物事を様々な角度から見てゆく」

今こうして言葉にすると格好良いが、未熟な年齢からそれをしてしまうとどうなるか。今思い返すと恥ずかしいくらいに、相当、ひねくれていたように思う。

しかし当時の私は、周りの子供とは違う考えを持ち、特別に近づいていると喜んでいた。

ひねくれてはいたが、周りの意見を頭から否定はしなかったおかげで、幸い、友達には嫌われずにすんだ。

その頃から調子づいた私は空想を広げて詩を書くようになる。

そうして高校生になった。ここまでもまだ一度もあの続きは読んでいない。

高校生になると色々な人と知り合えた。中学校の中では少し特別である立場におり満足してい

たが、高校生になると個性豊かな面々が現れ、私の知らない世界を見てきたであろう彼らは輝いており、私は埋もれた。

高校生活で私は軽音楽部に入り、楽器もさながら作詞にも挑戦することになる。そこで同じように詩を書く子にも出会った。

負けたくない、埋もれたくない。その頃からセーラは頻繁に私の脳内に現れ、ませた瞳でじっと私を見つめるようになった。

空想に空想を広げて、物事を斜に構え、感じることを文字にしてゆく日々。

私は感情を追い込んで詩を書いた。追い込めば追い込むほど些細なことで傷つくようにもなった。傷ついた感情をまた追い込んでそれでもまだ詩を書いた。繰り返した。内向的になっていった私はあまり目立つ子ではなかった。

書いた詩は軽音楽部の顧問の先生に読んでもらっていた。文法的な注意などはもらえたが内容に対する評価だけはしてくれなかった。

そうして3年間を過ごし、卒業である。軽音楽部の引退式の時のことだ。

顧問の先生は皆の前で、ひとりひとりに言葉をかけた。

なかなか名前が呼ばれない。目立つ子ではなかったのも忘れられているのかもドキドキしていた。周りみんなが呼ばれ終わり、最後が私だったのだ。

そこで先生がわたしにかけた言葉。

「ここにいる誰もが持っていないものを彼女だけが持っている」

その瞬間、私はやっとセーラに追いついた気がしたのだ。

しかしそれと同時にその物があやふやすぎて失ってしまわないかと不安にもなった。一体何を持っているのだろうと。

卒業しても詩を書いた。追い込んで書いた。プラスして、特別な何かを失ってしまう恐怖が常にまとわりついた。それでもやるしかない、更に追い込んだ。日常がうまく送れない。でも書くことをやめると特別がなくなってしまう。まだ追い込む。

限界だった。

死がものすごく近くにあったように思う。

私はついに特別ななにかを守ることを辞めた。心が軽くなったのを今も鮮明に覚えている。同時に情熱も失ってただガラガラと月日を消化し今に至る。

小公女セーラ

今回、初めて最後まで読んだ。

彼女はとても素敵な女の子であった。

今いる私の頭の中の彼女の眼差しは高校生の時のそれとは違い、とても穏やかで、怠けきった現在の私の日々に優しく前を向こうと思えるような光を、15年越しに、やっと、落としてくれた

ように思う。